

---

# ワケあり

monologger

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ワケあり

### 【Nコード】

N8467M

### 【作者名】

monologger

### 【あらすじ】

ある求人情報をもとに、メーカー指定運送会社の契約ドライバーになった稲田久志。その日に連絡を受け、業務仕様通りにトラックを運転し、指定の倉庫に家電品を運ぶ、そんな深夜労働である。倉庫の主は清水仲道と言った。久志に気安く接するが、倉庫の中に通すことはなかった。ある夜、巡回中の警官からトラック襲撃事件の話聞き、久志はあるアイデアを得る。それは業務仕様にある「検閲」の実態を知るために思いついたものだった。折しもその夜、久志は倉庫に入る機会を得、外箱に不自然な凹みがある家電品が置

かかっているのを見る。思いついた仕掛けは早速三日後に試されることになる。

三日後、久志はいつもより三十分早い検閲と納品の指示を受けていた。卸売を受け持つ倉庫では買い付けも行われる。この日はその買い付けに立ち会う名目で久志は呼ばれたのだった。豊川勢至と名乗る買付人は曰く付き品の専門。それらを買叩くように取引を進めていく。不正ではないが、久志の疑問は大きくなる。自身の運転で生じた不具合ではないことを示す必要もあるが、清水が買叩かれずに済ませるためにも重要だ。しかしながら、仕掛けによって得られた証拠は不十分な結果に終わった。

久志は再度仕掛けをセツトし、業務に臨むが、その日の検閲では不審な動きは確認できず、空振りとなる。だが、収穫はあった。

先のパトロールで会った女性刑事、森下若葉は襲撃事件の真相を追っていた。久志はそれに乗る形で、証拠の獲得に万全を期す。台風が近づく夜。業務を終えた久志はトラック車庫に戻り、仕掛けを確かめようとするが、何者かによってすでに見破られてしまっていた。すると、記録済みの証拠を取り戻そうと、見覚えのある車とともに男が現れた。事態は一気に緊迫する。

久志がこの仕事に就いたきっかけ、二年前の台風の夜の事件、そして真の黒幕とその隠された理由などがこの嵐の夜に明らかになっていくのだった。

## 初動

ポンプ場の脇道は妙に静かだった。久志は息を殺すようにただ時計の針を見つめる。蛍光塗料の針先がもうすぐ重なるうとして、約束の時間はあと五分に迫った。

荷室は開錠してある。それが誰彼の手で開けられるのが二十三時。扉が閉まる音が聞こえたら、指定の橋を渡り、指定の倉庫に納めるばかりだ。

静謐が深い分、乗り付けてきた車の音はすぐに耳に入った。そして定刻とともに開かれる扉の音も十分に聞き取れた。荷室で何かが無さされているのはわからなくもなかったが、扉の音に比べれば至って小さい。久志はただ秒針を目で追っている。

『ボタン！！ ガチャ』

閉扉の音は闇夜を引き裂くように響いた。思わず声を上げそうになるが、久志は辛うじて平静を保った。心臓には良くなさそうだが、業務仕様に記されていた検閲という行為はどうやらこれで終わりらしい。まだ鼓動が収まっていないが、とりあえず初任をこなせたことを久志は安堵する。

辺りは何事もなかったように息を潜めている。橋を往来する車の音も静寂に吸い込まれていく。その深い静けさはエンジンをかけるのを躊躇させる。だが、自分では意識しないうちにトラックを走らせていた。

橋を通り、クランク状の道に行く。やがて河畔の一角に辿り着くと、指示にあった倉庫が微かな灯りとともに浮かび上がった。戸口には一人の男が立っていた。そして、手を大きく挙げた。

「やあ、苦勞さん」

「はじめまして。稲田久志と言います」

「こんな深夜にすまんな。何せ出荷元が時間とルートを厳しく指

定するもんだから」

清水と名乗るその倉庫の主は、どこか苦虫を潰したような表情を浮かべつつも、積荷を要領よく捌いていった。

久志はあくまでドライバーである。業務仕様上もそれは明記されていて、荷降ろしには加担しなくていいことになっている。不自然な気もするが、逆に下手に手を出して不始末を起こす訳にもいかない。

手持ち無沙汰ではあったが、隅田川の緩やかな流れが発する音に耳を傾けているうちに時は案外早く過ぎた。

受取のサインをもらったら、あとはトラック車庫に戻るばかりである。だが、今日が初日である以上、しっかりと挨拶を交わしておきたいと思う。

「今日はありがとうございました。ところで清水さん、下のお名前は？」

「名乗るほどのことはないさ。ま、気い付けてな」  
名刺交換するには及ばないのはわかるが、随分とざっくりばらんなものである。

まだ道中にある以上、仕事を終えた訳ではない。だが、気分的にはすっかり開放的になっている。久志はふとこれまでの経緯を思い返していた。あの嵐の夜から何カ月が経っただろう。当時に比べれば今はマシになったものだ。状況が転じたのは差出人不明の便りが届くようになってからである。全く心当たりがないことはなかったが、確証はない。そんな直近の一通に紛れていたのが今回の求人情報だった。

いわゆる闇求人に通じる部分はあるが、運送業務としては至って真つ当だ。報酬が高額なのは深夜だから、という理由で十分通用するだろう。今の久志にとって腑に落ちないのは次の点のみである。

『20型とはいえ、液晶テレビ三十台分。いくら男手でも一人でやるか？ パツと見、五十代だろ？』

さすがに腕や腰に来たようだ。清水はストレッチをしながら携帯電話をしかと握り、声高に話し込む。

「ほんじゃ今日の分は鷹に回しとく」

倉庫の外灯が消えたのは日付が変わった時分だった。

\* \* \* \* \*

契約ドライバーという形態だったが、その日の指示はケータイメ  
ールで届くため、感覚としては日雇いに近い。毎日という訳ではな  
かったが、メールが届くのも、例の検閲が行われるのも、そして清  
水が待機しているのもいずれも時間通り。この規則性は人によつて  
は快感になるだろう。久志もいつしかハマっていた。

「じゃ清水さん、今日はこれで」

「ああ、お疲れ・・・」

労いかけたところで、清水の携帯電話が鳴る。

「ああ、そうだな、鷹で行くか」

足早に倉庫に戻るも、その会話の一部が漏れ聞こえた。

久志は特に気にするでもなくトラックに乗り込んだ。辺りが暗い  
分、月明かりが余計に映える。初夏の夜風が静かに通り過ぎていく。

冷夏になるか盛夏になるかで売れ行きが変動するが、一定の需要がある以上、これは動く。最新ではないが、省エネ性能はまあまあのエアコン一式が今夜の運搬物だ。トラックの加速がいつもよりも鈍い気がするはその重量感のせいだろうか。待機する時間が少しでも長ければトラックにとってはいい休息になる。

スピードは出ていなかったはずだが、いつもより早めに着いていた。常用しているメモリオードイオで何か聴いていても差し支えなさそうだ。だが、時間がずれた分、ちよつとした来訪を受けることになった。巡回中の警官である。

「今晚は。遅くまでご苦勞様です」

「あ、検問か何かですか？ いや、移動しないとダメとか？」

「いえ、以前この付近でトラックが襲撃された事件がありましたね。今日は変わったことはありませんでしたか？」

例の検閲の時間が近づきつつあるので、ここは手短かに切り上げたい。

「いいえ、別に」

事件のことが気になるも、久志は急くように一言だけ返した。

「とにかく用心してください。車載器が狙われることもあります。積荷ですね。防犯カメラを取り付けた業者もあるようですし」

「はあ、そこまでして」

警官はまだ何か言いたげではあったが、自転車を駆り、去っていった。検閲の車が到着したのはその直後のことだった。決して怪しいことをしている訳ではないが、検閲中に警官が来たら、と思うと冷や汗も出る。いや、仮に開扉している最中にその襲撃云々があったとしたら？

『そつちの方が深刻だよな。そつちやタクシー用のが出てるって聞いたことが・・・』

いつものようにボタン！が響く時、久志は一閃のアイデアを得るのだった。

警官が派出所に戻ってくると、黒スーツの女性が何やら携帯で話し込んでいた。

「あ、ごめんなさい。一旦切ります」

「貴女は？ 何かご用ですか？」

「警視庁 生活安全総務課 森下若葉と言います。夜分に申し訳ない」

「と、とりあえず中へ」

手帳を見せつつ、刑事は強盗未遂の話を切り出した。警官はすぐさま、

「例の襲撃事件ですね」

と応じた。

「ご存じでしょうけど、何も盗られなかったんですってね」

「新田橋を渡った先ですね。所轄が足立になるんであまり詳しくは聞いてませんが」

「いつもこの時間に夜回りを？」

「ええ、その現場付近にも」

思惑が当たったのか、若葉は微かに笑みを浮かべつつ、根掘り葉掘り様子を聞き出す。これでは取り調べそのものである。

刑事の方が自らの事情を語ったのは、しばらく経ってからのことだった。

「で、類似した事件がいくつかあったけど、実害がハッキリしないので生活安全担当になってしまって。でもある筋からの情報でトラックのルートを熟知した人間の犯行だろう、と」

「そいつの手がかりは？」

「何でも、栗の梅だか、梅の栗だか。黒幕のあだ名らしいんだけど、サツパリ。で、地元のお巡りさんなら何か知ってんじゃないかと思って」

派出所の前の街路はそこその道幅で日中は通行量も多い。今はほとんど往来はなく、静寂を保っている。その静けさは所内も同様だ。警官は黙り込んだまま動かない。

若葉は仕方なく席を起ちつつ、改めて問いかける。

「ここんどこ起きてないから所轄にお任せしてもいいんでしょうけど。区境が入り組んでるからやりにくいでしょ？」

警官はここですよやく口を開いた。

「とにかく巡回を続けます。ポイントが見つかったら張り込みでも何でも」

「そうね、確実な情報があれば、だけど。とりあえず不審者とか目撃者とか何かあったら知らせてください。私ももうちょっと廻ってきます」

女性刑事は自転車を力強く走らせた。警官はその姿をしばらく見送るしかなかった。

「室外機もあるからな。ちょっと手伝ってもらえんか？」

「あ、いいんですか？」

「妙な返事だな、いいも何もないさ。こつちが頭下げてんだ」

回を重ねれば開かれるものがある。それは倉庫の内扉であり、倉庫主の心理的な扉である。久志はおそろおそろだったが、足取り確かに歩を進める。二人がかりでなくとも運べるサイズではあったが、どうも腕が震えていけない。その点、清水は至って飄々としたものだ。その腕っ節には何らかの理由がありそうだが、久志が訊ねたのはごくありきたりのことだった。

「清水さんとは中継というか仲卸、ですか？」

「そうさな。ま、見ての通りの規模なんで卸ってほどでもないけどな。一応地域の電器屋に卸すのが専門さ」

整然と仕分けされた家電品の数々。ただ一角にはそうとは悟られないような置き方で、凹みらしき不具合を認める梱包品が固まっていた。運んできた立場としては釈然としないものを感じるが、身に

覚えはない。納品してしまえばそれまでである。

倉庫を出る手前、小さな事務室の出入口には倉庫の規模からして不釣り合いな大きさのホワイトボードが立てかけられていた。急ぐ必要はなかったのだが、気が急いでいた久志はただ一字の漢字がいくつか並んでいるのを見るにとどまった。『鳶』『梅』『鴻』

「こつ、のとり？」

思わず口にしかけると、清水はすかさず、

「ま、そのうちわかるさ。風流でいいだろ？」

と応じ、さらには「おお、そうだ！」

一段と強く声を上げるのだった。

「名刺を渡しとくよ。ま、これまで何もなかったんで別に要らねえかも知んねえが」

「清水、仲道さん」

「卸だけど仲介みたいなもんだからな。覚えやすくいいだろ？」  
取って付けたような名前だが、名刺は名刺だ。あいにく名刺の持ち合わせがなかった久志だが、清水は特に気にするでもなく、いつも通り労をねぎらって倉庫に戻っていった。

荷が軽くなつたトラックだが、ドライバーが何かを呟きながら走らせているので、スピードは出ていない。ライトの先を何かがよぎったが、わかつたのは無灯火の自転車、ということだけだった。黒一色なので人物像も特定できない。

## 公開買い付け

三日ほど空いたが、今日の予定は織り込み済みだった。元々はタクシーの防犯用として出ているカメラを前職の伝手で調達し、久志はカバンに忍ばせる。トラック倉庫に顔を出す際はこれといったチエックもないので、自身で簡単な点検をしてから乗り込むばかりだと、不意に携帯電話が鳴った。

原則として通話による連絡はないことになっているが、発信者は雇い主だ。どうやら緊急らしい。

検閲時間を三十分早める、倉庫への納品もその分繰り上げる、今回は倉庫から搬出する分の検品に立ち会うよう要請を受けたので現場で指示に従う、そんな内容が早口で告げられた。

どこか聞き覚えのある声だったが、極めて紳士的だったので、それ以上勘ぐることはなかった。ただ、三十分前倒しというのは厳しいか。そんな自問が久志を圧すのだった。

メーカー倉庫からの出庫を早め、食事時間を切り詰める。法定速度での運転を何とかキープし、ルートも守った。息は上がっていたが、いつものように右左折を繰り返し、ポンプ場の路傍に辿り着く。手筈を整え、シートに戻った時点で二十二時半。呼吸はなかなか整わない。

定刻きっかりではなかったが、開扉する音が届いたことで、久志には言いようのない緊張が走る。間に合った、という安堵感が勝りそうなものだが、そうではない。トラックの中も外も妙に静かなのがかえって不穏にさせる。少なくとも扉が閉まる音が聞こえるまでは落ち着くことはない。

長い長い数分間が過ぎ、扉は閉められた。その音に勢いが感じられなかったため、発車をためらうことになるが、指示に従わない訳にもいかない。倉庫で待つ人がいて、今夜は立会いもあるのだ。

冷静さを欠く運転だったせいか、いつもの橋での徐行が不十分になる。ちよつとした段差だが、その振動は思いがけず大きかった。後方で異音がした。積荷でなければいいが、果たしてどうか。

「おう、おつかれさん」

外灯で照らされた清水の顔は赤らんで見えた。それとは対照的に久志の顔色はあまり良くなかった。

「青い顔して大丈夫かい？」

搬出先の関係者と目される人物も外で待っていた。

「あ、どうもすみません。稲田と言います」

名刺を差し出すことはなかったが、その中肉中背の男はフルネームで名乗った。

「豊川勢至せいじです。今日は早めに買い付けようと思って来ました」

「買い付けですか」

「まあ、稲田君はとりあえずそこで待っていてくれや」

清水はそう言い残し、扉を開けた。大声が聞こえるまで、さほど時間はかからなかった。

「ありや！ 今日はまだ・・・」

そして、清水は豊川の様子を見させるのだった。

久志は内心ドキドキではあったが、つとめて平静を装う。荷崩れが起きていないことは音でわかる。何らかの損傷があるとすれば、それは別の理由だ。

「時間を早めた分、多少荒れたかな？」

「いえ、速度的には問題なく。ただ、ちよつと段差で・・・」

久志は話を合わせつつも、正直に言うべきは言うようにした。

「どこでどうなったかはともかく、これじゃ電器店は嫌がるでしょう」

軽口だったが、豊川の一言は久志に突き刺さった。だが、いざとなれば自らに責がないことを晴らすことはできる。それでも下手に外す訳にはいかない。二人がカメラに気付いたら気付いたで構わな

い。事情を話せばわかってもらえるだろう。

小物家電も積んでいたが、この日のメインは小型冷蔵庫十点。久志も何となく運び出しを手伝っているが、台車に載せればあとは清水の独壇場だ。豊川は台車に付き添いながら、これ見よがしに品定めをしている。

「もうちょっと何とかありませんか？」

「これなんかいいところ、こんなもん？」

立ち会うよう言われているので、二人の様子を見るとはなしに見ているが、これでいいのだろうか、と久志は思う。買い付け人は指を伸ばしたり、折ったりを続ける。清水は電卓を打ちながら、時に苦々しい顔をしている。取引の現場はこうして公開され、久志はその立会人となった。

先日目にした凹み梱包の品々を含め、どうやら交渉はまとまったようだ。辛うじて束とわかる厚さの紙幣を持って清水は事務室へと姿を消す。豊川は器用に台車を操って搬出を始めた。久志はさっきから出入口に居て、見張り番のような格好になっている。

無印のトラックを見送ると、いつもと同じような雰囲気に戻る。

今は清水の顔色が冴えない。

「という訳でさ、搬入したての荷姿を確認してもらうことにしたんだけどよ」

「やっぱり僕のせいだ・・・」

「なーに、メーカーからの直接仕入れだろ。もともと安いからいいんだ。でもって配送業者もメーカー指定だ。何かあったら一応補償はしてくれる。買い叩かれても引き取ってくれるだけマシってもんさ」

お手上げといった面持ちながら清水は訥々と語る。だが、自分の所為にされたままでいいはずはない。証拠はまだ確認できていないが、その端緒は得た。ならば、と久志は強い調子で話す。

「何と言つか、自分としては納得いかない点がなくもないんで何か証拠でもあれば買ひ叩かれなくて済むと思っんですが」

検閲の件は口外できない。だが、あの不自然な凹みが生じるとするなら、検閲時をもって他にはなさそうだ。

一見堅気ではあるが、豊川にどこか不敵なものを感じた久志は、できることなら清水に助け舟を出したい気分には駆られていた。検閲の現場に立ち会ってもらえば話が早い気もするが、まずは自分なりに証拠を押さえてからだろう。

ちよつと間が空いたが、清水は屹然と、

「証拠？ 何か思い当たるフシでもあんのか？」

と問う。

「いえ。ただ少なくとも僕の落ち度ではないことは証明したいんです」

「ま、俺がどうこう言わないんだから、それでいいのさ。稲田君は指示に従って運んでるだけで、意図的に何かやらかしてる訳じゃないだろ？ 荷姿が多少おかしくなるのは想定内さ」

納得した訳ではないが、自分を庇ってくれる以上、弁解も何ももう要らない。久志は一礼し、倉庫を後にした。

そろそろ日付が変わろうとしている。

## 不審

懐中電灯の照らす範囲で動きを押さえることはできたが、赤外線モードにしていなかったため、証拠としては不十分極まりなかった。映像的には失敗だった訳だが、梱包に手をかける物音と少なからぬ衝撃音を拾うことはできた。今日はモードを変えて確たる証拠を得るか、あるいはいつそ勝負に出るか、どっちかだ。

三十分早く着く術を心得たため、久志は今、荷室に居て、カメラチエックを繰り返している。作動音がしないとはいえ、見つからずに済む保証はない。天井を見上げられたらおそらくそれまでだ。『いけね、そろそろ定刻だ』

果たしてこの日は何事もなかったように開閉が行われ、むしろいつもより早いほどだった。気抜けした状態ではエンジンもかかりにくい。と、先日の警官が不意に現れた。

「どうも夜分に」

「ああ、どうも」

この時の久志の心持ちは、驚きよりもむしろ救いに近いものだった。もし何らかのトラブルに巻き込まれていたら、と思えばこそその感情である。が、そんな気分でいられたのは束の間のことだった。

「ねえ、運転手さん、扉を閉めてその後クルマで出てった人物って知り合い、ですか？」

黒づくめだったので、すぐには認識できなかったが、長身の女性が尋問してきた。これには驚きを隠せなかった久志である。

「あ、いや、その」

やましいことはしていないつもりなので、業務仕様については話すことにした。自分まで怪しまれては元も子もない。

「じゃそこで何をやってるかってのも極秘事項？」

「自分なりに探りを入れようとは思ってますが」

「ま、ちょっとワケありみたいだから、こっちでも調べてみまし

よう。今のクルマが割り出せればよかつたんでしょうけど、向こうもやり手みたいだね。ナンバープレート、識別できなくて」

「ところでどうして刑事さんがここに？」

襲撃事件の話をした後で、刑事は名刺を差し出す。

「雇い主からは別に警察に通報するなどは言われてないでしょ？」

何か不審なことがあればいつでも連絡ください」

遅れた理由を考えながら走っていたら、いつしか倉庫に着いていた。清水は怪訝な顔で棒立ち然としている。

「遅かつたな」

「橋のところでパトロールに遭遇しまして。すみません」

「そうか、パトロール・・・」

何かを思い出すように眩きながら、清水は扉を開ける。

「ま、無事ならいいや。今日は上々じゃないか」

今度は久志が訝しげな表情になる。『上々？』

売れ筋の液晶テレビとセット品のレコーダーが十ずつ。アウトレツト品も積んではいたが、いつもより物量が少ないせいか、荷がどうこうなることはまずなかった。手を出した形跡は本当にないのか？ いや証拠なら撮れている、そう信じたい。

「そういやこないだ言ってた証拠ってえのは、どうだい？」

「いえ、単なる思いつきで、特には。今日は大丈夫だったことですし」

「は、そうだな。でもパトロールってのは困りもんだな。時間をずらしてもらえりゃいいのかも知れんが」

「いやその、飲酒運転の検問ですから、そんなにしょっちゅうじゃ」

「職質とかされなかつたか？」

「メーカー専属の運転手ってことで済みました」

清水は首を傾げながらも何度か頷いて、サインを済ませる。帰り

際にはいつもの調子に戻っていて、陽気に送り出してくれた。

真夜中の車庫は気味のいいものではない。長居しないに越したことはないが、今夜はそうは行かない。動く証拠が録画されていることを確かめないことには

「今回は本当に検閲だけだったのか」

何度か再生してみたが、結果は同じ。懐中電灯で照らして外箱を指差し確認する男の姿が映っていただけだった。

\* \* \* \* \*

警官は護岸で行き止まりになっている道を見つけると、用心しながら進んでいった。そして、まだ外灯が点るその倉庫の前に自転車を置くと、吸い込まれるように入っていた。

「おお、来たか」

「公務の一環で来ました。で、今夜はどうしたんです？」

「パトロールは順調か？ってな」

「話が大きくなってしまって、刑事が来てます」

「そうか・・・ ああ、彼はどうだ？ 何か妙なことでなかったか」

「探りがどのとは言ってましたね」

「やはり勘付かれた、ってことか」

同じ頃、久志はとりあえず若葉に一報を入れていた。

「次回は三日後、同じ時間ですね」

「わかりました。こっちはその検閲人を追うってことですね」

「組織的な匂いがしてきました。バレないようにお願いしますね」

「ええ。でもどうしよう・・・」

久志は固唾を呑んで続きを待つ。自ずと武者震いのような感覚に陥るがぐっところ見える。

「あ、稲田さん、ごめんなさい。その、何かわかったら早く知らせようと思うんだけど、どうかしら？」

「どこかで待機するってことですか。前日も遅れちゃったんで、微妙ですね」

「わかった。じゃ怪しまれないようにだけして、とにかくケータイ出てください。あ、もしもし？」

「はい、どうかしました？」

「稲田さん、もしかして梅栗だかってご存じ？」

「ウメクリ？ 栗原の梅木ならどこかで聞いたような」

「それって闇物流系とか？」

「倉庫荒らしでしょう」

久志はこの時、事務室のボードに書かれていた梅の字を思い出していた。電話はいつしか切れていた。

『何か関係が？ いや、まだわからんな』

謎は残るが、話はずいた。あとは当日を待つばかりだ。

## 近づく嵐

「やあ、おまわりさん。ちょっといいかな？」

その男は、護岸の方から近づいてくる警官を見つけると、こつ呼び止めた。

「あ、あなたは？」

「ちよつと調べ物しててね。梅木って人物の居場所探してんだけど、知らないかな？」

「さあ・・・」

「おまわりさん、その倉庫は知ってんだろ？ 梅木って名前、聞かないか？」

「本官、パトロール中なんで。ん？」

「どうかしたかい？」

「いえ、どこかで似た人に会ったもので」

辛うじて顔形がわかる程度だったので、はつきりとはわからない。警官は首を傾げながら、ペダルに足をかけた。

「そういうこともあるさ。ま、梅木はいいや。安売りっていうか、何か中古品の店がこの辺にあるよね。わかる？」

警官は大まかな道順だけ伝えると、逃げるように去って行った。

『何かあるな。とりあえず見に行くでしょう』

これまでは不思議なくらい雨に降られることもなく、せいぜい通り雨の後とか、蒸し蒸しした夜風が強めに吹くとかそんな程度で済んでいた。それがこの日の夜はどうしたとか、突如として台風が近海に発生したことで、さっきから空が不気味なことになっている。検閲は終わった。扉がやたら強く閉まったのは風に煽られたためだろう。だが、久志にはそれ以上の何か、不吉な原動力とも呼ぶべきものが発した音のように感じた。

雨が降り出したら厄介だ。だが、早く着き過ぎてもいけない。ひ

とまず携帯電話はいつでも取れるようにしておいて、至って低速で倉庫へと向かう。

清水はいつものように待っていた。待ちぼうけを食ったような顔もせず、

「おう、今日はさっさと終えようや」と至って快活だった。

今回はいわゆる新古品のエアコンが中心だが、箱には作爲的な凹みが見てとれた。それでも清水はさして気にする風なく、淡々と搬入を続ける。

「あ、電話だ。すみません、室外機、あとで手伝います」

「あいよ」

久志は運転席に戻り、通話ボタンを押す。

「森下です。何かね、ディスプレイショップに着いたわ」

「早かったですね。てことは近く？」

「こないだ自転車を通った近くね。豊島のどこか」

「店の名前ってわかります？」

「暗くてハッキリしないなあ。馬のマークみたいなのは見えるけど」

「馬？」

「ま、手がかりとしてはいい方ね。念のため、GPSで位置を知らせましょう。やり方・・・えっ、何？ キャー！」

話の途中で悲鳴が聞こえた。

「あれ、もしもし？ 大丈夫ですか！」

耳を押し当てると、ドアを開け閉めする音が響いた。さては検閲人に見つかっただか？

居ても立ってもいられなくなるが、今は動けない。そうこうするうちに清水がやって来てノックする。

「何だよ、彼女か？」

「あ、いえ・・・」

「そろそろ頼むわ」

手も足も覚束なくなっているが、早く終えようとするほどさらなる狂いが生じる。事務室手前で久志は思わずよろけてしまった。だが、ボードに手がかったことで、あることを思い出すのだった。

清水は豊川に買い付けてもらったために用意した例の一角に今はいる。久志は隙をつくように携帯電話でその盤面を写す。この際、いちいち文字を確認している暇はない。ただ、その脇にアルファベットと一桁の数字の組み合わせが並んでいることは見逃さなかった。配達記録のようにも見えるが、どうなのだろう。

先を急ぎたい久志は閉扉を清水に任せ、ガチャ！が聞こえると同時にアクセルを踏んだ。バックミラーに手を振る清水の姿が見える。好人物ではあるのだが、引っかかるものはある。何につけ今夜の動画次第だ。

豊島にあるディスカウントショップというだけでは探しようがない。とにかく一旦停止しよう。電話してみるか、いや誰が応答するかわからない、下手に電話して発信者が知れたら・・・久志の自問自答が続く。

時間が無為に過ぎようとしている。嵐が近づきつつあるのが街路樹の揺れ具合でわかる。と、そんな揺れを倍加させるような勢いで着信音が鳴る。

「さつきはごめんなさい。探偵さんみたいな人が声をかけてきて」

「探偵ですか」

「貴方にちよつと似てたから余計ビックリしちゃって。で、その人の話でね、この界隈は昔、馬場って言ったそうよ。大字は豊島、字が馬場。だから馬のマーク？」

「てことは、動物と地名とに関係が？」

「さあ。あ、またクルマが動いたわ。いったん切りますね」

「探偵さんも一緒なんですか？」

と久志が訊いた時には通話は途切れていた。若葉の無事がわかったのはいいとして、その探偵と称する人物が気になる。自分に似ているとなれば、尚更である。

様々な想いが交錯するも、とにかく息を整え、携帯電話を操作する。動物に限ったことではないかも知れないが、その関係性の片鱗はつかめた。久志は先の画像を若葉に宛てメールする。そしてゆっくりと車庫に向けて出発するのだった。

「探偵さん、この画像見てもらっていいですか？」

「これは？」

「今はちよつと匿名ですけど、その倉庫に出入りしてる運転手さんからです。何かヒントになれば」

「上から、栗、梅、松・・・下が貝。馬？ 馬もありますね」

「馬つてさっきの？」

「もしチェーン店なら、ですね。でもな」

探偵はよれよれになった古地図を取り出すと、部分的に広げて凝視し始めた。

「貝が貝塚だと田端の辺。鷹が鷹番だと上中里。鴻ノ巣、鴻ノ台つてのは滝野川あたり。確かに字の名前と重なる・・・」

「栗は栗原？」

「栗原・・・あ、大字赤羽だ」

検閲の車を追いながら問答が交わされる。今のところ事件は起きていないが、何か起きようとしていることは刑事にも探偵にもわかっていた。風が強まるにつれ、その意も強くなる。日付はとうに変わった。

## それぞれのワケ

若葉からのメールが届いたのは車庫に着く直前だった。

「そうか、店の所在地だったか。それにしてもよくわかったな」  
夜が深い上に天気が荒れているとあっては、心細くもなるし、心穏やかでもいられない。久志が奮い立つように動いているのはただ、何かを晴らしたい、そんな想いゆえである。

勢いよく扉を開けると、風が一気に吹き込んできた。

「さて、ん？」

荷室の天井を見遣る。懐中電灯を当てる。あるべきはずのカメラは？ 風が虚しく中を一巡する。

落胆が襲うところだが、恐怖感がそれを上回ったのは他でもない。閉めかけた扉が俄かに反射を集め、その輝度が増してくる。ハイビームが近づいてきた。その車には見覚えがある。

『外したのは検閲の時か、いや、倉庫で荷室を開けた時はまだあったはずだから・・・』

この時が来るのを待っていた。心の準備だつてできている。この際、カメラの行方はどうでもいい。今、近づいてくる相手と対峙すればいいだけだ。

「豊川さん、ですね」

「つたく、ヤボなことしやがつて」

「ヤボ？ ああ、今持っているそのことか」

天井に仕掛けておいた小型のカメラは豊川の手中にあった。

「撮ったのは今日だけじゃないだろ？ 見過ごす訳にはいかなくてな。テープがあればよこしな」

久志は後ずさりしながらも胸に手を当て、あるスイッチを押す。胸ポケットには常備の機器が忍ばせてある。

「そういうことなら尚更渡せないね。それとも取引でもしますか

？」

「取引か。だいたいウチの取引に問題がないことを示そうと思つて君に立ち会つてもらつたのにな。それで面が割れちゃしゃーねえな」

「問題がない？ よく言うよ。不正もいいところだろ」

一陣の強風が二人の間をすり抜ける。膠着状態がしばらく続く。

「清水さんが気の毒だった、つてのはあるな。でもそれは最初だけ。ウチの取引つても違つた。ウチら、じゃないのか？」

「は、何言つてやがる」

「今となつては録画を見るまでもないさ。それをアンタが持つてゐることが何よりの証拠」

豊川は大きく舌打ちすると、車の後席に目を転じる。久志にはすでに察しはついていていた。若葉からのメールには、途中から尾行車に誰かが乗り込んだことも記されていたのだ。

「やつぱり自作自演でしたか、清水さん」

「ヤレヤレ、バレちまつたからにはいよいよ放つておけんな。でもどこでわかつたんだ？」

「パトロールつて言っただけだったのに、随分と警戒されてましたよね。積荷をどうこうしたともこつちは言つてなかつたし」

「ほう、それだけで」

「あとは、例の風流な一字ですよ。自分で電器店に持つて行くのなら、何も隠語みたいなのを使う必要はないし、漢字の横の数字がやけに少なくなつたんでね」

「豊川に流す分だからな。そこまで見抜いてたか。ま、こつちも捜査状況を耳には入れてたがな」

「捜査状況？ まさか、あの警官・・・」

「まあ、そういうことさ。話がさつさとついてよかつただろ？」  
「分が悪いのは明らかだが、決着を急ぐことはない。久志は時間を稼ぐためにあえて次のような問いを發した。」

「未だにわからないのは栗と梅の関係かな。栗原にも梅木へうめ

のき》にも店はある。荒らし屋の名前と接点がありそうなことまではわかった。清水さんなら知ってんじゃないか？」

「そう来たか。そこまで知ってるってことは貴様只者じゃねえな」「こつちも同業みたいなもんさ。兄弟で音響機器の取り次ぎをやつてたんだ。でも二年前にこういう事件があつた。そう、今日みたいな嵐の日さ。そりゃ雨風が強けりゃ何かが降ってくるってことはある。でも隣が材木屋だからって角材が降ってくるってのは考えられない。破れた天窓からは雨水が大量に入り込んだ。苦勞して仕入れたメモリオードイオは外箱損傷つただけで、大損さ」

「なるほどな。つてことは中味は無事だつた。で、そいつを買い叩かれちまつた訳だ」

「天災扱い、しかも盗まれた訳じゃないから保険が下りない。そんなこんなで立ち行かなくなつて兄貴は失踪さ。こつちは残りで何とかしのいできたけど、泣き寝入りはしたくない。あれは事故じゃなくて事件だ。で、その一味につながる手がかりが届いた。今回の仕事さ」

「黒幕の名前は知ってんのか？」

「荒らしの梅だろ。ルートや保管先を知ってる人物、加えて角材を放り込む豪腕な奴の犯行つてことは確かだよな」

清水は豊川と顔を合わせると、

「どうする？」

とだけ聞いた。

「コイツもワケあり品にしますか。動けなくしてから倉庫で何箱か崩せば事故で済む」

「へへ、俺様の腕っ節は半端じゃないぜ。いつも鍛えてっからな」「そ、そういうことだつたか」

真相をつかんだ久志に、間髪入れず清水が殴りかかってきた。辛うじて交わしたが、ひるんだところを今度は豊川に押さえ込まれてしまった。万事休す、か。

次の瞬間、大きなクラクションとともに、覆面のパトカーが滑り込んできた。停車したのは清水の手前数メートル。さすがの豪腕もこれには怖気づくしかなかった。

「はいはい、そこまで！ 警察よ」

現行犯ということなら暴行未遂か。だが、まだ収まった訳ではない。

「知ったことか！ 女だからって容赦しねえぞ」

清水は再び腕力に訴えてきた。と、すかさずその腕を止めた男がいた。助手席から飛び出してきた探偵だった。

「あ、ありがとう。はい、そのままのまま。公務執行妨害で現行犯逮捕、します」

豊川はその場にへたれ込んでしまった。清水はすっかり神妙になっている。

「あ、兄貴？」

「何だ、やつぱり久志だったか」

「やつぱり？」

「どこかでぶち当たるって踏んでたんだ。ウラで情報つかんで、お前に送ってたからな。トラック運転手の求人情報も、な？」

探偵の名は稲田一茂と言った。弟と会うのは二年ぶりのことだ。

「そうか、てめえもあん時の。兄弟で潜入捜査みたいなことしやがって」

「アンタの店、北区じゃ評判らしいじゃないか。その中の赤羽店、いや旧地名で言うなら栗原の店主さん、人呼んで『栗の梅』さんよ。風はさっきから凪いでいて、それがかえって嵐の接近を知らしめる。やがて、大きめの雨粒が落ちてきた。だが、待避できる場所はない。」

「応援がまだ来ないけど、取り急ぎ聴取します。本当の名前は？」

「コイツの言うとおりさ。俺の名は梅木、梅木番吉」

「清水ってのは偽名だったか」

豊川を牽制しながら様子を見ていた久志が口を挟む。

「清水坂の近所なもんでな。適当に名前をこしらえたまでよ」

「偽名の上に捏造って訳ね」

「これでもカタギな方よ。ちょうどエコポイントとやらが始まって、こつちで安くしなくても値ごろ感が出せるようになった。今がチャンスってことさ」

放置していたカメラを手にとって、豊川は後ずさりし出している。梅木はそれを見逃さない。

「おい、勢至！ 今更どこ行く気だ。お前も一緒だ。おとなしく待ってる！」

「あの人が検閲人、つまり箱に手を出していた・・・」

若葉の聴取が続く。梅木は開き直ったように応じる。

「捏造の張本人さ。検閲は奴の手下も時々な。まあ豊川はちよつとした事情通でな。正規ルートを手前の都合に変えるのもまた得意なんだ」

「一連の襲撃事件も貴方たちの仕業？」

「メーカーからの指定を取った時点でいつでも工作できたんだけどな。こういうのは巧妙にやらねえと。襲われたことにすりゃ補償は確実だろ？」

さすがに豊川も黙っていられなくなった。血相を変えて近寄ってくる。

「梅さん、まだ証拠が揃った訳じゃなし。どうせ録画はまだこの中さ。こいつを壊しちまえば」

「ああ、証拠が！」

若葉が叫んだ時にはすでにカメラに足がかかっていた。豊川の足元に破片が転がる。断続的だが、雨とわかる雨が降り注ぎ始める。

「あいにくだな、豊川さん。ここまでの会話は全部こいつで録らせてもらったよ」

「久志、もしかしてそれは」

「小型だけど性能はいいんだ。メモリーオーディオってのは聴くだ

けに使うんじゃないのさ」

「畜生！」

「あつ、こら待て！」

豊川は脱走するが、一茂に追いつかれ、車の手前であっさり押さえられてしまった。久志が駆け寄ると、ようやくパトカーが二台到着し、豊川の動きは完全に止まった。雨も風も一段と強さを増していた。

現場にいた四人はパトカーに分乗して、署に向かう。豊川が一台に、もう一台には稲田兄弟、梅木は若葉が走らせていた車に乗ることになった。車中では取り調べの続きが行われる。

「巻いたはずなのに、よくここがわかったな」

「携帯電話からの信号を受信するだけだから。そんなことより貴方の話が先。偽装を始めた動機は？」

「メーカーからまともに買い付けても大して売れねえし、価格統制みたいのもあって思うように行かなかったんだ。でもよ、ある時『アウトレット』だ、最近になって『ワケあり』だつてなつてきてよ。これを並べ出したら事情が変わった。メーカーも苦労してんだろうけど、販売店の反旗つつつか、ひと泡吹かせてやるかって。で、自分で手を入れることを思いついたのさ。だいたい外っ面が傷んだくらいで値段がガタ落ちすんのがおかしいんだ。だろ？」

「まあ、アウトレットつて確かに仕掛けがよくわからないけど」

「とにかくだ、そのカラクリを逆手にとることにした訳だ。だが、襲われたフリつてのはそう何度もできねえ」

「それである方法を思いついた」

「新田橋を通りゃガタガタするし、その先のクランクを曲がれば荷崩れだつてしそうなもんだ。よくあることだったら、問題ないだろ？」

「いよいよ台風が近づいてきた。外では悲鳴のような音を立てて風

が流れていく。梅木の声も今はその音に消されそうだ。だが、話は続く。今は声を絞り出すようにしている。

「なあ刑事さんよ、言い訳がましくなるが、もうちょっと聞いてくれないか」

「不利になる話なら別に言わなくていいですよ。強要はしません」と息ついてから梅木はその理由を語った。

「知つての通り、ここは年寄りが多い。家電品を買いに行くのを億劫がる御仁も多い。鉄道は発達してるかも知れんが、量販店まで出かけて、つてのはなかなか。近所で済んで、しかも安けりゃいいことないだろ？ こちとら配達だつて無料だ」

「そうですね。いろんなワケがあるものね。でもあの兄弟には申し訳は立たないでしょ？ ま、詳しいことはまた署で聞かせて。梅栗さん」

「俺は栗原の梅木だ！」

元の威勢に戻った男は不思議と血色がよかった。風雨はいつしか弱まり、今はサイレンの音が勝っていた。

## それぞれのワケ(後書き)

\*ご清読、ありがとうございます。設定解説を含む目次サイトは、  
http://www.chochoirajp/wakear  
i/ になります。(8/1)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8467m/>

---

ワケあり

2010年10月10日18時35分発行